
戦乱の勇者の伝説

リオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦乱の勇者の伝説

【Nコード】

N2067U

【作者名】

リオン

【あらすじ】

ティーアやラフラといった同じく魔眼保持者達と出会いながらも目の前で、自らに平和への望みを託し散って逝った幼い命に戦う事を誓ったライナ・リユートが相棒と共にその誓いを心に秘めてまもなく世界を飛ばされてしまう・・・

異世界へ(前書き)

ISの方は少し煮詰まっていけないので更新が遅くなるかも・・・

異世界へ

「（……………ここはどこだ？）」

ライナの意識は暗い闇の中をさまよっていた

「（俺は確か、ガスタークの奴にアルファ・ステイグマを暴走させられて……………ダメだ、思いだせない）」

確かにライナはガスタークから来た刺客によつて魔眼を共鳴させられ暴走する一歩手前までいっていたが、その時に存在していた世界からはじきだされていたのだ……………しかし、ライナがその事に気づくのはもう少しあとのことである

「（……………ラフラ）」

ライナの心に残るその名前の者は彼にどこかで無理だといって諦めていた絶望の先にある誰も失わない世界を掴むことを約束させた今はなき人物だ

「（ラフラ……………お前は俺のことを優しいと言つてたけど、それはやっぱ間違いだよ……………俺はただ自分が傷つきたくないから、自分で自分を守つてる……………ただそれだけだ）」

誰に話しかけるでもなくライナはただ心の中で叫び続ける

「（俺は・・・俺は、世界を変えられるのか？・・・ラフラ）」

?SIDE

「うっすっかり遅くなっちゃったわね」

「まあ、仕方ないじゃろう。近くの村とはいえ視察に行つて帰つてくればこうなることは分かつておつたことじゃし」

夜の荒野を二人の美女が馬に乗つて駆けていた

「でも冥琳も酷いと思わない？お酒を飲む暇があれば視察に行つて来い、とかさ。暇だから飲んでるんじゃないやなくて飲む為に暇を作つたのに！」

「まあまあ策殿、帰ったら付き合いますよござ」

「ホント？絶対だからね！」

「うむ……ん？なんじゃ？」

「どづしたの、祭？」

「いや、なにやら光のようなものが落ちてきてるような気がするん
じゃが……」

「ズルズル〜」

「あ、あそこじゃ！策殿！」

「……ホントだ」

「あれは一体なんじゃ？」

「……天の御遣い」

「むっ。」

「ほら最近、巷で噂になってるじゃない・・・太陽のように輝く光と共にこの地に降り立った天の御遣いが動乱の世を太平へと導くであろう・・・って占い師の予言が出回ってるの知ってるでしょ？」

「その噂は聞いたことがあるんじやが、どうせ眉唾ものじゃと思っ
ておったからのお」

「でも、目の前にあんな物が落ちてきたら信じるしかない？」

「むう、信じるかどうかはとにかくとりあえず行ってみますかな？」

「ええ、もちろん」

「ん？なんだ？・・・さっきと違ってフワフワ浮いてる感じじや

なく、背中が地に着いている感じはするが・・・起きられん、というか意識がはつきりしない)」

「この辺に落ちたように見えただけだなあ」

「さ、策殿！あまり一人で行動しないでくださいな！」

「ちよつと祭、しっかりしてよね」

「あまり老骨をいじめんでくれ」

「戦場では何里も駆けるくせにどこが老骨なんだか・・・あっ！」

策殿と呼ばれるその美女は何かを見つけたのか勢いよく駆けていく

「さ、策殿！！」

その姿を追いかけるように妙齡の美女もまた駆けていった

「もしかしてこの人がさっきの光と一緒に落ちてきたのかな？」

「人が光に包まれて落ちてくることなどあるもんかの？」

「じゃあ祭はこんな変な格好した人が最初からここで寝てたって言うの？」

「むう・・・確かにおかしな格好ですな」

ライナの今の衣服はこの世界では考えられないもののようにだ

「（だ、誰か近くにいるのか・・・フェリスか？）」

「う〜ん・・・とりあえず連れて帰っちゃおうか」

「ほ、本気ですか、策殿！」

「（フェリス・・・じゃない？）」

「うん な〜んか面白そうな気がするのよね」

「また”勘”ですかな？」

「そ、勘よ」

「言い出したら聞かないお方じゃからな、しかし冥琳に何を言われることやら」

「ちよ、今から冥琳のことを言わないでよね！それは私もちょっと怖いんだから」

「ハッハッハ！では連れていくのはやめますかな？」

「それとは別問題」

「やはりな」

「（おい、人のことを連れていくとか何とか勝手に話を進めるな！くそ！どうして身体が動かないんだ！）」

「じゃあ祭、これ馬にくっつけちゃって」

「策殿が運ぶのではないのですか!?!」

「だ〜って私も疲れてるんだもの」

「はあ、わしじゃって疲れておるのですぞ?」

「祭なら大丈夫!さあ帰りましょう」

「やたらと楽しそうですか?」

「ええ、私の勤が言ってるの。この人は絶対呉にとって・・・いいえ、この国にとってなくてはならない人になるって」

「ほお、そこまで買っておられるのですか」

「ふふっ これから楽しくなるわよ?」

楽しそうに話す傍らで意識がはっきりしないまでも二人の話声が聞こえているライナの胸中は穏やかなものではなかった

「(勝手に話進めてんじゃねえよ・・・やっぱり、面倒くせえ)」

異世界へ(後書き)

勢いで書き始めたけど面白くなっていけばいいな

温かい場所

ライナSIDE

「（・・・ここは、どこだ？）」

ようやく意識がはっきりしだしたライナは自分がどこにいるのかわかる為に辺りを見まわした

「俺はたしか、ガスタークの奴らと闘りあって、そしたら突然目の前が光だして、その後意識がはっきりしないままどっかの誰かに城に運ばれて・・・城？」

辺りを見回せばそこはとりあえず個室の部屋だったが、意識朦朧とした中で見えたあの城がここかどうかは分からなかった

「まったく、マジでどこだよこは」

「おっ！起きてるな少年！」

「！！（こいつ、確か俺を連れてった奴か？）」

「ちょっとちょっと、そんなに警戒しないでよ。これでも一応助けてあげたんだから」

「助けただあ？」

「そうよ？そういうえば貴方どうしてあんなところで寝てたの？」

「あ？あんなところってどこだよ？」

「荒野のど真ん中」

「だれがんな所で寝るか！（俺は確かにどこでも寝れるがそんな所で寝る趣味はない）」

「いや、そんなこと言われても実際そこで拾ったわけだし」

「・・・お前、もしかして頭おかしい奴か？」

「失礼ね！私から見たらあなたの方がおかしい奴に見えるわよ！」

「・・・これじゃ話が進まないな」

「誰のせいよ！誰の！」

「すまん、声を少し下げてください、寝起きでまだ頭がはっきりしてないんだ」

「……（チャキ）」

「こらこらっ、ただ話してるだけなのに剣を構えるな！（こ、こいつフェリスに似た恐怖感がある！）」

「それじゃあ、これ以上ふざけたこと言わないでくれるかしら？」

「俺はふざけたつもりなんてこれっぽっちも（チャキ）……分かった」

「ふう、ちょっと冥琳と祭呼んでくるから待ってなさい！」

バタン

褐色の肌をしたその美女はライナにそう告げ少しばかり怒気をはら

んだ様子で扉の向こうへ行った

「……まったくどうなってんだよ、少なくともここがローランドじゃないのは分かったがな（もしここがローランドなら外からの流れ者でもない限り俺を見て誰だか分からないはずないからな）」

良くも悪くもライナの顔はローランドでは有名になっていたのだ

「……情報が足りん、これじゃあ現状を理解するのは到底無理だ・
……やっぱさっきの奴から聞き出すしかないな」

ライナがそう決意してすぐにその相手は戻ってきた

「入るわよ！」

そう言って入ってきたのは先ほどの美女とその者に負けず劣らずの美女二人だった

「……また増えたな」

「呼んでくるって言ったでしょ？」

「さて、ここからは私が話そう。雪蓮では話が進まないだろうからな」

「それ、正解」

「だから、誰のせいよ!」

「雪蓮」

「ぶーぶー、何で私が怒られるのよ!」

「早速だが、お前の名前は?」

「……別に教えたくないとかじゃないがそういうのは普通聞く側から言うものじゃないのか?」

「……それもそうだな、私は性は周、名は諭、字は公瑾だ」

「……は?」

「ではついでわしらも名乗ろうかの、性は黄、名は蓋、字は公覆じや」

「いや、ちょっと待て」

「私は性が孫、名は策、字は伯符よ。さあ！私達は名乗ったのだから貴方も名乗りなさい！」

「……その名前って本物？」

「当たり前でしょう、名前なんて嘘ついてどうするのよっ」

「（マジでどうなってんだよ、孫策とか周瑜って確か三国志とかっていう書物の登場人物だったよな）」

「それより早く名乗りなさいよ」

「あ、ああ、俺はライナ・リユートだ」

「ら、らいなっ？りゅとっ？」

「おい、人の名前を変な風に呼ぶな、ライナ・リユートだ」

「性がライ、名がナ、字がりゅーと、か？」

「いやいや、性がリユートで名がライナだから。後、字とかそんなものはない」

「字がないとは変わっているな」

「俺から見たらそんなものある方が変わってる」

「まあいい……ではライナ、お前が発見された時のことは知っているか？」

「荒野のど真ん中で寝てたらしいな」

「そつだ、その事は覚えているのか？」

「いや、孫策に聞くまで知らなかった」

「……質問を変えよう、お前はどこの生まれだ？」

「……それは絶対に答えなくてはならないことか？」

「答えられないのか？」

「答えられないというよりは答えたくない……過去の事はあまり
思いだしたくないんだ……」

「……そうか、ではどこから来た？出身ではなくその直前までい
た場所を答える」

「正確な場所は俺もよく分からねえけどローランドの外れの小さな
小屋だな」

「どこだその、ろーらんどというのは？」

「……（これはやっぱりそうゆう事なのか？こいつらが嘘さ
えついてなきや、設定的には三国志そのもので俺の言ってることが
さっきからほとんど伝わってないってことは、ここは俺のいた場所
じゃない……つまり、ひじょく~に考えたくないことだがここ
が三国志の世界だつてのが一番しっくりくるな……なんか面倒
臭い事になってきたな）」

「おい、どうした？また答えられないか？」

「・・・それを答える前にひとついいか？」

「・・・言ってみる」

「これはあくまで俺の仮設だが、おそらく俺はこの世界の人間じゃない」

「どづいじとじじゃ？」

「あくなんて言ったらいいかな、俺にとってこの世界は書物の中のものなんだ」

「・・・いつてる意味が全くわからないんだが？」

「だよな・・・まあとにかく！俺はこの世界の事を知らない、お前達は俺の言ってる世界のことを知らない、この二つだけでも俺が普通じゃないってのは分かってんだろ？」

「ああ、狂ってるのかとさえ思っている」

「そこまでかよ！・・・まあ、そう思うのも当然か」

「ねえ冥琳、何か証拠を見せてもらえばいいじゃない」

「ふむ、そうだな・・・何かこの世界の者ではないと証明するものはあるか？」

「・・・この世界って魔法はあるか？」

「魔法って何？」

「・・・なさそうだな、魔法ってのは決まった言霊を言って使える呪術みたいなもんだ」

「呪術！？」

「下がってくださいね！策殿！・・・こやつ、まさか妖術師とは」

「・・・なんかとんでもなく悪い印象みたいだな」

「何かするつもりなら、わしが相手になってやるぞ！」

「あ、それなら私も「伯符！」「うわ！怖っ！」

「だから何もしねあって・・・でも証明しないとイケないんだよな、なあちよつと広いところってないか？」

「・・・それなら中庭があるが」

「じゃあそこで俺の魔法を見せてやるよ、もちろん危ないと思ったら反撃してくれていいぞ？」

「・・・いいだろう」

そして俺は孫策達に連れられ中庭まできた・・・ずっと射抜くよう
な3人の視線を浴びながら

「・・・ふう、これで証明になったか？」

「な、なんだ、今のは？」

「だから魔法だって」

「・・・何という威力じゃ」

「（こいつらのこの目・・・今までに何度も見てきたあの目だ・・・『化け物』・・・元いた世界じゃ魔法くらいならこの言葉を使われることはなかったが俺には他にもそう呼ばれる理由がある。そしてこいつらにとっては魔法そのものが初めてみるだろうし、この威力だって想像を絶するものだっただろう・・・次にこいつらから出てくる言葉なんて目にみえてるな）・・・俺は「すごい!!」・・・は？」

「貴方、すごいよね!!」

ライナの予想とは裏腹に孫策から出てきた言葉は『化け物』という蔑みの言葉ではなく、『凄い』という賛辞にも似た言葉だった

「（何を言ってるんだこいつは？・・・すごい、だと？・・・あんなものを見せられておいてどうしてそんなに目を輝かせていられ

「るんだ？」

「魔法って初めてみたけどこんなに凄いんだ！ねえ、私にもできる？」

「いや、分からんが、使えたら使いたいのか？」

「当たり前じゃない こんな凄い力使えたら格好良いじゃない！」

「……（俺がおかしいのか？……いやこいつが普通じゃないんだ、普通ならあんなもの見たらこっちの奴らは恐怖し、それを使ったものを畏怖の眼差しでみるはず……他の二人はきっと）」

「確かに、今の力には興味があるな」

「……」

「わしのような老体でも使えるんじゃないだろうか？」

「……」

しかしこちらも、ライナの予想を超えライナの使った魔法に対して恐怖等感じておらずむしろ興味を持っていた

「な・ん・だよ」

「ん？何か言った？」

「なんなんだよ！お前からあんな力を目にして怖くねえのかよ！！」

「怖い？何で？」

「何で、だと？・・・あのなあ、もし俺が今お前らに向かってさっきの魔法を使えば一瞬で跡形もなくなるんだぞ？そんな力を知りもしない奴が使えてんの怖くもなんとねえのかよ！？」

「うゝん、だって私達に向けて使うつもりなんてないでしょ？」

「なっ！」

「それに知りもしないって言ったけど、貴方の名前も聞いたし、分からなかったけど元いた場所も聞いたじゃない」

「た・・・たったそれだけじゃねえか！」「それに！」・・・」

「確かに会ってからまだそんなに経った訳じゃないけど貴方と話してみても変な奴だとは思ってたけど悪い奴には見えないしね」

「・・・・・・・・（こいつもか・・・）」「たたく世界が変わってもこんな変な奴はいるもんだな」

「異世界の者で謎の力、か・・・これは決まりかな？」

「そうじゃな」

「何の事だ？」

「お前、天の御遣いという言葉に心当たりは？」

「天の御遣いだあ？知らないな」

「とある占い師の予言でな、その天の御遣いが戦乱の世を鎮めると言ってるな。この国でもかなり広まっている話だ」

「それで? (・・・なんか嫌な予感がする)」

「私も最近までは眉唾物だと思っていただけだが、目の前にいる人物を見るとあながち嘘でもないなと思ってな」

「俺が天の御遣いだって?・・・それはないな」

「なんでよ?」

「俺は天なんて称されるような人間じゃねえんだよ」

孫策・黄蓋・周瑜SIDE

「俺は天なんて称されるような人間じゃねえんだよ」

そう言ったライナの目は今までに見たことのないほどの悲しみに染

まっていた

「（なんて悲しそうな目なの、まるで、世界の全てに絶望したような・・・そんな目）」

「俺が・・・天なんて・・・」

「（どうして貴方はそんな悲しい顔をするの？・・・もつと貴方の事が知りたい・・・誰かを見て知りたいなんて思ったのは初めてね）」

孫策がそんな思いにある時、この場所にいる他の二人も似たような思いを抱いていた

「（こやつ、何と辛そうな顔をするんじゃ・・・な、なんじゃ？この、何がなんでも守ってやりたくなくなるような気持ちは・・・こんな気持ちは初めてじゃな）」

「（・・・よほど辛いことでもあったのか？・・・話したくないと言った過去に繋がっているのだろうか？・・・知りたい、こいつの考えてることも、こいつの過去も・・・）」

ライナSIDE

「とにかく、俺は天の御遣いなんかじゃねえよ」

「・・・別に本当に天の御遣いである必要はないのだ」

「・・・どういう意味だ？」

「周囲の人間にお前が天の御遣いだと認識させられればそれでいいんだ」

「俺を天の御遣いにしたてあげる・・・そう言ってんのか？」

「そつだ」

「そんな事してお前らに何の得がある？」

「今、私達の国である呉は、はっきり言ってあまり良い状況下ではない・・・だから貴方の力を貸してほしいのよライナ」

「俺の力？（・・・こんな化け物じみた力を貸してほしいってのか）」

「そうよ」

「はっ！まああの力があればこの世界なら大抵の奴には勝てるだろうからな、戦力兵器としてこれ以上の人材はいないからな」

「戦闘兵器？・・・勘違いしてほしくないわね、私はただ単に貴方の力に惹かれて呼びこんでるわけじゃないのよ？」

「・・・」

「自分で気づいてるかどうかわからないけど、さっき『俺は天なんて称される人間じゃない』って言ったとき、ものすごく悲しそうな顔してた・・・あんな顔する人がこれまで普通に幸せに暮らしてきたとは思えない」

「・・・（そんな顔してたのか、俺）」

「だからこそ！そんな辛さを知ってる貴方だからこの国で同じように苦しんでる民達の為に何かしてくれるような気がしたのよ！」

「……………（こんな力で救える物があるのか？）」

「だから……………『あなたに救ってほしい』の！！』」

「！！！！」

『思ったとおり、優しい人ですねライナさんは』

『あなたは寂しがり屋だ』

『人間に絶望した悲しい神の眼の保持者達を……………あなたに救ってほしい』

「……………（ラフラ）」

孫策の発したその言葉は偶然なのか、ラフラの言葉と重なってライナには聞こえた

「……ったく！……最近、人類やら世界やら救ってくれとか言われてる気がするな（ボソッ）」

ライナは誰にも聞こえないような小さな声で不満を少し嬉しげに呟いた

「……俺なんか何かしても悪い状況になるだけかもしねえぞ？」

「そ、そんな事ない！私の勘が言ってるの、あなたといれば間違いないって」

「……勘？」

「フフツ、雪蓮の勘を侮らない方がいいぞ？私が見てきて間違ったためしがないからな」

「……はあ、ま、改めてよろしく頼むわ」

「ええ……あ、そうだ。こうして仲間になっただんだけし真名も教えないとね」

「真名？」

「私達の本質を表した名前で、信頼するものにしか呼ぶことの許されないものだ」

「そんな大事なもんいいの？」

「だってこれから呉を救ってくれる英雄様だもんね、当然よ」

「誰が英雄だ、誰が」

「フフツ、改めて！私は孫策、真名は雪蓮よ！よろしくね」

「わしは黄蓋、真名は祭りじゃ。これから楽しくなりそうじゃな」

「私は周瑜、真名は冥琳・・・ライナ、お前には期待させてもらおうぞ？」

「あまり過度な期待はするなよ？」

「これでライナも私達、孫呉の家族の仲間入りね」

「・・・家族？」

「ええ！真名まで許してこれから共に闘っていくんだから家族ですよ？」

「・・・（家族か、そんなもの二度とできないと思ってたんだけどな・・・悪くない・・・かもな）」

「よし決定！今日からライナも家族の一員」

「（・・・性格は正反対だけど、マイペースな所とか強引な所はそっくりだな・・・フェリスに）」

今はいない相棒とどこか似た雪蓮の明るい笑い声につられて、ライナも小さく笑みを漏らした

温かい場所（後書き）

一刀どうしようかな・・・

ライナの過去

孫策SIDE

いつも通り、仕事を抜け出して散歩していた孫策は最近、天の御遣いとして呉に入ったライナのことを探していた

「ライナっていつもどっか行っちゃってるのよね」

少し不貞腐れたように不満をもらす

「あーライナだー!!」

しかしライナを見つけた瞬間に先ほどの不満もどこへやら、一目散にライナへと近づいていった

「ライナ 何してるの?」

「ん?雪蓮か・・・」

少し面倒くさそうに雪蓮の方へと顔を向けたライナは相手を確認す

るとまた眠るかのように目をとじた

「ね〜、何してるのってきいてるんだけど?」

「見て分からねえか? 昼寝だよひ・る・ね」

ライナは誰の目から見ても明らかかなほどぐったりした状態で横になつていた

「昼寝が好きなの?」

「ああ、何もなくていいなら一日中寝てられる自信がある」

「ぶーぶー、そんなのつまんな〜い」

「そりゃお前の意見だろうが、俺は最高に楽しい」

「ぶ〜……………ねえ、ライナ」

「何だよ?」

「何で誰とも話そうとしないの？」

「……………」

「ここ数日ライナのこと見てたけど話しかけられる以外にライナから話しかけたこと一度もないでしょ？」

「……………別に、用事がなかったただだよ」

「本当に？」

「……………」

「初めて会った時に過去の話は話したくないって言ってたけどそれに関係してるの？」

「……………」

「言いたくないならいいんだけどさ、何かいっつもライナが辛そうにしてるの見てるとこっちも辛いからさ」

「……………もし」

「え？」

「……………もし、この世界で生まれた時から魔法が使えるような奴がいたら……………そいつはどうなる？」

「……………私はどうか分からないけど、少なくとも周りの民達からは辛くあたられるかもしれないわね」

「……………だよな」

「あ、でもライナは大丈夫よ？ちゃんと天の御遣いだって言うてるから」

「別にそんなこと心配してるわけじゃねえよ……………つまりさっき言った通りの人生歩んできたってことだよ」

「……………どつゆつこと？」

「俺の世界じゃ魔法なんて別に特別な力じゃないが、そんな世界で

も普通の人間にはない力が俺にはあつたんだよ。そのおかげで俺は色んな場所を転々として、自分の場所も見つけられなかった・・・ただそれだけだよ」

「（それだけって言うけど、それがどれ程の苦しみなのか私には分からない・・・でも、せめてこっちの世界にいる間くらいはライナにも笑っていてほしい、昔の苦しみなんて忘れるくらいに楽しんでもらいたい）」

「・・・」

「・・・ライナ！」

「・・・何だ？」

「お酒飲まない？」

「・・・はあ？」

「だから！お酒飲まない？って聞いているの！」

「さっきまでのシリアスな空気どこいったよ！？」

「しりあす？何それ？」

「……もういい、色々面倒くせえ」

「なによう！教えてくれたっていいじゃない！」

そう言っつて雪蓮はライナの腕にしがみついて抱きしめた

「な、ちょ、バカ！くつつくな！」

「あら、これくらいで赤くなるなんてライナって初なのね？」

「べ、別に赤くなんてなっつてねえよ／＼（やっぱ、こいつといると調子が狂っつ）」

「あはは まあまあ、そんな事どうでもいいからお酒飲も？」

「………ったく、仕事はいいのか？また冥琳に怒られてもしらねえぞ？」

「だ〜いじょうぶよ 冥琳なら今頃、私の代わりにお仕事頑張ってるはずだから」

「・・・ほう、私はお前の代わりにお仕事頑張らなければならぬのか？」

「・・・ライナ、冥琳の真似するの似てるじゃない」

「あんなに似るわけねえだろうが」

「雪蓮!!」

「ひつっ!?!」

「全く!仕事を放りだしてライナと二人っきりになるとはいい度胸じゃないか」

「あ、冥琳も二人っきりになりたかった？」

「な!?!」

「なぐんだ それなら言ってくればよかったのに、じゃあ冥琳は明日ね、今日は私の番で」雪蓮・「は、はい」

「どつちやら相当仕事をしたいらしいな」

「そ、そんなことないわよ」

「いいから来い！」

「いやあゝ、ライナ！見てないで助けてよ！！」

「……………」

「ちよつと無視！？」

「さあ、明日私が仕事を休めるようにしっかりと働いてもらっぢぞっ」

「いゝやあゝゝゝ」

「…………あれで本当に王様かよ…………お仕事大好きなシオンとは正

「反対だな」

そう言いながら連れて行かれる雪蓮を見るライナの顔は今までで一番穏やかなものだった

??? ? ? ? SIDE

「……………ここは、どこだ？」

綺麗な金色の髪をなびかせながらたたずむ美女もまたこの大陸へと飛ばされていたのだった

「おい、ねえちゃん随分と良い物持ってんじゃねえか？」

「アニキ、こいつ身体の方もかなりの上玉ですよ」

「ひ、久しぶりに良い獲物なんだな」

「……世界が崩壊してしまうほどの美貌の私を捕まえたいのは分かるが捕まるわけにはいかない」

「」「」「」「」

「お前達は目でみる以上に醜い」

「こ、こいつ無茶苦茶くちがわりいぞ！」

「しかも自分のことを美人って」

「じ、自信過剰なんだな」

「そんなことはない！私は美人だ！！」

「」「」「言いきった！？」「」

「とまあ、冗談はこれくらいにしておこう」

「て、てめえ調子こいてんじゃねえぞ！」

3人組のリーダー格が美女に向かって剣を振りおろす

「・・・ふむ」

バキッ

しかし、その剣はあっさりとかわされ思いつきり顔面を殴られた

「アニキ!？」

「遅いな、これならまだ変態男の方が早いぞ」

「だ、だれなんだなソイツ」

「お前達には関係ない・・・で？お前達もやりたいのか？やって
もいいが顔が今以上に醜くなることになるぞ？」

「ひ、ひええええっ」

「ま、まってなんだな」

情けない声を出し残りの二人はやられた男を担いで逃げていった

「……さて、隠れているということは斬られてもいいということだな？」

「よ、よ、よくないですっ」

「鈴々やってみたいのだ！」

「ええい、話をややこしくする鈴々！」

「なんだお前達は？」

「あ、私は劉備といいます」

「鈴々は張飛なのだ！」

「私は関羽、劉備様一の家臣」

「（劉備、張飛、関羽……どこかで聞いたような気もするが、
気のせいか）」

「あ、あの、貴女は天の御遣い様ですか？」

「……なんだそれは？」

「最近、ある占い師が天の御遣いが現れ乱世を鎮めるだろう、と予
言をしたのです」

「………で？」

「そ、それでその御遣い様を探していたら、見たこともない服を着
た方がいらっしやったので貴女が天の御遣いなのではないかと思い、
隠れて見させていただきました」

「………（これはライナも嫌う面倒事というやつか？……なら
ば）」

ダッ

「え？え？ええっ！？」

美女は何も告げることなく突然3人が立つ場所の反対方向へと全速力で駆けていった

ライナの過去（後書き）

就活が落ち着くまでは更新間隔が今回くらいだと思います

それぞれの戦いの場へ（前書き）

今月末くらいからは更新が早くなるかもしれません

それぞれの戦いの場へ

ライナSIDE

「……………」

「……おい冥琳」

「なんだ？ライナ」

「なんで雪蓮の奴あんなに不機嫌なんだ？」

「ああ……また袁術の奴に無茶なことでも言われたんじゃないか？」

「袁術？」

「お前にも話しただろう、我ら呉は文台様が敗れた際に袁術の支配下に置かれたと」

「そんなことも言ってたな」

「それからというもの、我らは反撃の機を待ちながら袁術の言いつ通りに行動しているのだよ」

「そうしないと潰されるってか？」

「そういつことだ、今度はどんなことを言われたんだかな」

「冥琳！祭と穩を連れてきて！！」

「分かった」

「（こんな不機嫌な奴と二人つきりとかやめてくれよ）」

「……そんなところで何してるのよ？こっちにくれば？」

「（そんな殺気出してる奴に近づくと奴なんていないっての）へいへい
い」

「……なんか嫌そうね」

「別に嫌ってわけじゃねえけど」

「ないけど、何よ」

「・・・勘弁してくれよ、何でそんなに不機嫌なんだ？」

「・・・どっかのバカに面倒くさいこと頼まれたからね」

「袁術って奴か？」

「そうよ、わかってるんじゃない」

「で？何を言われたんだよ？」

「皆がきたら言っわ・・・腹が立つから何度も言いたくないのよ」

「・・・了解（冥琳早くきてくれよ！）」

「待たせたな」

「まっただくだ!!」

「?、何を怒っているライナ」

「っ、何でもねえ」

「あら、雪蓮様だけじゃなくてライナさんも不機嫌なんですか?」

このゆったりし過ぎなくらいゆったりした気の抜けたような声で話すのは陸孫、真名は穩。雪蓮や冥琳、祭とは違って色白の肌だがその身体は3人に負けず劣らずだ・・・この国の人間は全員こんな感じなのかと思うのは俺だけだろうか

「・・・祭がまだ来てねえけどいいのか?」

「祭ならさっきここに来る途中で徴鍊してるのを見たから後で伝えるわ」

「そうか」

「では会議を始めろぞ、雪蓮」

「ええ、今回私が袁術に命じられたのは最近町を騒がしてる黄巾党を討伐してこいってことよ」

「黄巾党・・・確か黄色い鉢巻をつけてるからそう呼んでるんだっけか？」

「そつだ、最近では数も増えてきて本体の数は10万とも言われている」

「・・・10万ねえ」

「そして私達が叩くのはその本体よ」

「何？」

「ほえ〜」

「あのおバカは私達だけで黄巾党の本体を潰してこいってぞ」

「・・・無茶にも程があるな」

「今の私達ではどんなに頑張っても5千が精一杯ですからね」

「その代わり蓮華達を呼び戻してもいいってさ」

「・・・それを許すか」

「本当にバカよね」

「ああ、だがそれはありがたいことだ」

「・・・蓮華って誰だ？」

「蓮華様は雪蓮様の妹ですよ」

「へえー、あいつに妹なんていたのか」

「ええ、それにもう一人一番下の小蓮様がおられますよ」

「……あいつが長女とは思えないな」

「あはは、それは言ってるかもしれないですね」

「ちょっとそこ！無駄話しない！！」

「あらら、怒られちゃいました」

「小蓮様も呼び戻すのか？」

「いいえ、何があるか分からないからあの子は呼ばないわ」

「……そうだな」

「……何もねえとは思っけどな」

「……どうしてそう思うの？」

「その討伐って俺もどうせ行くんだろ？」

「もちろん連れていくつもりよ？」

「なら俺の力を忘れたわけじゃねえだろ」

「もちろんライナの力は凄いいけど今はまだ隠しておきたいのよ」

「そうだな、今お前のごことが他の諸侯にバレると色々面倒だ」

「……なるほど、それなら今回俺はただ見てればいいんだな？」

「いや、お前はなかなかにも頭も回りそうだからな。今回の戦から私がお前に軍師として面倒をみてやるわ」

「……」

「なんだ、嫌そうだな」

「……なんかすげえ面倒くさそうだな」

「ふっ、お前なら大丈夫だ」

「なんだその根拠のない自信は」

「とにかく2日後には出発するわ、各自用意をしておいて！」

「分かった」

「了解しました」

「軍師があ、面倒だなあ」

フェリスSIDE

「もう一度お聞きします、貴女は天の御遣い様ですか？」

「違つ」

「」「」「」

「あな」違つ「・・・むっ」

「と、桃香様、周りに人も沢山おられますのでそのようなお顔は

「さつきから何度も同じ質問をしてお前はバカなのか？」

「貴様！桃香様に向かってなんたる態度！！ここで成敗してくれる
！！」

「ちよ、愛紗ちゃん、落ち着いてっ！」

「にははは、姉者の方が落ち着くのだ」

「し、しかしっ！」

「愛紗ちゃん？」

「うっ、わ、わかりました」

荒野で出会ったフェリスと劉備達一向は鬼ごっこを続けながら辿りついた町でとりあえず話しをすることになったのだった

「うっん、それじゃあ質問を変えようかな。どうしてあんな所にいたんですか？」

「わからん」

「……えーっと、それじゃあ、あそこで何をしてたんですか？」

「わからん」

「……」

「貴様！真面目に答える気があるのか！！」

「さっきから真面目に答えているが？」

「どこがだー!!」

「全てだ」

「~~~~~っ、桃香様!!」

「あ、逃げたのだ」

「う、うるさいぞ! 鈴々!!」

「・・・もう行ってもいいか?」

「えっ? 行ってくてどこか行く所があったんですか?」

「いや、ここがどこだか分からんしどこへ行くとも決まってるが
見つけねばならない奴がいるのでな」

「誰ですか?」

「変態男だ」

「へ、変態男？」

「そうだ」

「だ、誰なんですかそれ？」

「ふむ・・・あいつは私の相方で奴隷で茶飲み友達だ」

「相方と奴隷って一緒に使う言葉なのかな」

「まあ私とあいつの関係はそれが一番適切だな」

「そ、そうなんだ」

「それで？お前はその相方がどこにいるのか知ってるのか？」

「知らん」

「・・・それでどうやって探すつもりなんだ」

「手当たり次第に探していけばいつか見つかるだろう」

「………決めた!!」

「桃香様？何を決めたのですか？」

「私達に力を貸してくれませんか？」

「む？」

「愛紗ちゃんだっけ見たでしょ？この人の力！」

「………確かに剣の扱いはそれなりにあるように見えました」

「だからね！力を貸してほしいの!!」

「………話が見えないのだが」

「私達は苦しんでる人達を助けたくて町を出ただけどね、3人だ

けじゃ出来ることなんて限られてるって事に気がついたの」

「そんな時に天の御遣いが舞い降りるといふ噂を耳にしたのです」

「そうそう だからね、私達に力を貸してもらえればって思ったんだけど・・・ダメですか？」

「・・・というより私は天の御遣いとやらではないと言ったと思うのだが？」

「あ、それはいいんです。確かに天の御遣い様が力を貸してくれれば一番だけど貴女も強いし力になってくれたらこれまでより多くの人を助けられるって思うから」

「・・・条件がある」

「なんでしょっ？」

「さっきも言った通り、私は探している人物がいる。だからそいつが見つかったら私は力を貸せなくなるがそれでもいいのか？」

「うっっ、それは嫌だけどそれを飲まないと力は貸してくださらない

いんですよね?」

「当然だ」

「・・・分かりました!じゃあその探してる人が見つかるまででもいいので力を貸してください!」

「・・・いいだろう」

「ではでは改めて、私は劉備で真名は桃香って言います!よろしくねっ」

「私の名は関羽、真名は愛紗です・・・貴女には引つかかる所もありませんがこれから仲間となるのだから宜しく頼む」

「鈴々は鈴々なのだ!ヨロシクなのだ!」

「私はフェリス・エリス、お前達のように字やら真名等といったものはない」

「フェリスさん・・・か、真名もないんだね」

「真名というのはその者の本質を表す名だから本人の許しなく呼ぶことは許されない神聖なものだ、覚えておくといい」

「覚えておこう、それでまずはどこへ行くんだ？」

「えっとね、この辺りに前のお友達が太守をやってる所があるからそこへ士官に行こうと思ってるんだけどいいかな？」

「いいもなにも私はこの世界のことにはさっぱり分からん、お前達に任せる」

「うん それじゃあ、行こうー!!」

邂逅

ライナSIDE

「おい雪蓮、準備終わったぞ」

「あ、ライナ 御苦労、御苦労」

「御苦労じゃねえよ！なんで王のお前が一番休んでんだよ！！」

「えゝ王だから休んでるんじゃない」

「意味わかんねえから！（まったく！王つてのはどの世界でもこんな変な奴ばっかりなのかよ）」

「むっ、なんか変なこと考えてるでしょ？」

「か、考えてねえよ（そして変な所で鋭い）」

「本当かしら？」

「そ、そんな事より冥琳に準備ができたからお前を呼んでこいって
言われてんだから早く来いよ！」

「あ！逃げた！！」

「逃げてねえ！話なら後で聞いてやるからさっさと来い！！」

「ぶっわかつたわよ」

「マジで勘弁してくれよな」

「遅い！二人とも何をしていた！！」

「いや、遅くなったのはこいつが呼んでんのにこねえから……」

「ちょっと！人のせいにするの!？」

「事実だろう！」

「……………用するに二人で仲好く話してたら遅くなったと？」

「今の会話を聞いて何故その結論に至った!？」

「……………冥琳ヤキモチ？」

「……………」

「あゝ凶星だ　ふうん冥琳がねえ」

「……………」

「お、おい雪蓮、そのくらいにじとけ」

「何でよ、こんな楽しいこと滅多にないわよ？」

「いやいや、冥琳さんの雰囲気は尋常じゃねえから」

雪蓮が振り返った先にいる冥琳は禍々しいほどの殺気をただよわせていた

「………雪蓮」

「な、なに？」

「……誰が……ヤキモチをやいたと？」

「え、わ、私そんなこと言っただかな？」

「（こいつあれだけからかったのになかったことにしようとしてんのかよ!?!）」

「……ではさっきの私の幻聴か？」

「そ、そんなんじゃない？冥琳ったら朝からずっと戦の事考えてるから頭がおかしくなってるのよ」

「ほう、私は戦の事を考え過ぎて頭がおかしくなってるのか」

「（雪蓮のアホ！）」

「え、いや、そういう意味じゃなくてね」

「……雪蓮！……」

「は、はい……」

「貴女には後でゆっくりと二人で話したい事があります」

「い、今じゃダメ」なにか？」……何でもありません」

「（あのお気楽雪蓮が負かされた）」

「……それからライナ」

「え、お、俺？」

「お前にも後で話しがある」

「な、なんで俺ま」（ギロツ）なんだ？」・・・何でもありません」

「よろしい、では二人とも出発するので準備をしてください」

「は、はい！！」

普段では聞くことのないような低い声で冥琳は二人に告げるとゆっくりとした足取りで去っていった

「雪蓮のアホ！なに俺まで巻き込んでんだよ！？」

「仕方ないでしょ！冥琳が怖すぎたんだから！！」

「ったく！もっと上手く流せるだろうよ」

「うるさいなあもう終わったことなんだからいいでしょ！」

「・・・二人ともまだ懲りていないようだな」

「「ただちに準備にとりかかります!」!」

フェリスSIDE

「お、フェリスここにいたか」

「む?お前は……」

「公・孫・賛だ!」

「それがいたかった」

「本当かよ……まあ、私の名前なんて覚えておくほどのものじゃ

ないさ」

「そうか」

「ちょっとは否定しろよ！」

「お前はどっしてほしいのだ」

「ううゝ私、こいつは星の次に苦手だ」

「おや、私は伯桂殿に苦手だと思われていたとは悲しいですなあ」

「うおっゝ、せ、星！？いつからそこにいた！？」

「最初からおりましたぞ？」

「嘘をつくな！」

「ところでフェリス殿、愛紗達が出陣の準備をするからと呼んではたぞ」

「そうか」

公孫贇に星と呼ばれているこの女は性が趙、名は雲、字を子龍とい
いここで公孫贇の客将をしているそうだ。ちなみに公孫贇はここ幽
州で太守をやっているそうだ

「なんか今、私が簡単に説明された気がする」

「なにを訳のわからない事を言っているのです伯桂殿」

「まったくだ」

「うるさいうるさい！私達も出陣の準備をしに行くぞー！！」

「いちいち反応が面白い奴だ・・・あいつと絡ませてみるのも面白
いか」

「ふふっ、これだから伯桂殿をいじるのはやめられませんな」

「まったく、意地の悪い奴らめ」

「なんと人聞きの悪いことをおっしゃるのですか」

「事実だ!!」

「やれやれ、それでは参りますか」

「そうだな」

二人が出会うことになるのはもうすぐのことだ。その時、運命の輪はどつ巡るのか

邂逅（後書き）

今回は短め、これからはこれまでよりかは更新が早くなると思う

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2067u/>

戦乱の勇者の伝説

2011年7月21日03時30分発行